

卒 業 論 文

兵庫県の人口

平成 28 年 1 月 19 日提出

島田智明 研究室

学籍番号 1282687b

氏名 平松秀隆

目次

はじめに	…1
兵庫県的人口状況	…1
回帰分析について	…3
仮説・検証	…5
兵庫県の現状と改善	…16
治安	…16
子育て環境	…20
地域への愛着・誇り	…25
まとめ	…27

兵庫県的人口

神戸大学経営学部

平松秀隆

はじめに

近年日本では少子高齢化、人口減少が進んでおり、これからも続いていくと予想される。人口が少なくなっていくとともに、自治体の運営は厳しくなっていく。納税額が減少するからだ。数十年前の状況と同じになるだけではないかと考える人もいるかもしれないが、同じにはならない。人口が増加しているときには、土地や道路を開発したり切り拓いたりする必要があったし、そのための資金もあった。しかし、人口が減少していったらどうだろう。開発したところは使われなくなったり、利用者が減っていったりする。それでも維持していかなければならないし、維持には費用もかかる。また、数十年前と人口構成を比べると、現在の方が生産年齢人口の割合は低く老年人口の割合は高い。納税者が少ないのである。つまり数十年前の人口が同じ時期と比べると、自治体にとって収入は低く支出は大きくなっているのである。これでは同じ状況とは言えない。人口がピークのときに建てたり開発したりした施設や土地、道路などを、これから人口が減少していくなかでも維持していかなければならない。しかし、人口が減り続けていけば、必ず限界がくる。よって、これから進んでいく人口減少を少しでも食い止めることが自治体の課題であると言えるだろう。今回、兵庫県庁様から提供していただいたデータを、統計分析ソフトウェア Statistical Package for Social Science (以下 SPSS) を用いて統計的に分析し、兵庫県が人口を維持していくためには何が重要なのかを検証していきたい。また、本研究では自治体の運営のために人口減少を食い止めることが目的であるので、人口とはいっても、生産年齢人口と、未来の生産年齢人口となる年少人口を増やすことを目標としていることを述べておく。

兵庫県の人口状況

まず兵庫県の人口状況をみていきたい。Google Chrome 上で閲覧することができる地域経済分析システム Regional Economy Society Analyzing System (以下 RESAS) のデータを用いる。これは国のまち・ひと・しごと創生本部が運営しているサイトである。国勢調査によって実数がとれているものが実績値、データに基づく予想が推計値である。実績値がとれている一番近い年は 2010 年

で、このときの総人口は5588133人、年少人口は13.5%、生産年齢人口は62.9%、老年人口は22.9%である。この時点ですでに、2005年と比べて総人口と、年少人口と生産年齢人口の割合は減少し、老年人口の割合は増加している。そしてこの傾向は今後も続くと予想されている。ここで、1985年のデータと2025年のデータを比較してみる。1985年の総人口は5278050人、2025年の総人口は5268695人でほぼ同じである。両者の人口構成をみるとしよう。1985年は年少人口21%、生産年齢人口67%、老年人口10%である。対して2025年は年少人口11%、生産年齢人口58%、老年人口30%となっている。このように、2025年の時点では40年前と総人口はほぼ同じであるが、人口構成が全く異なっている。年少人口と生産年齢人口は10%低く、老年人口は20%も多い。これではやはり総人口が同じでも状況が同じとは言えないだろう。また、人口の増減は自然動態と社会動態に分けられることを述べておきたい。自然動態とは出生・死亡による増減、社会動態とは転入・転出による増減である。兵庫県の自然動態と社会動態をそれぞれみていきたい。まず自然動態であるが、2010年時点での合計特殊出生率は1.41であり、これから人口が減少すると予測されている。合計特殊出生率とは、一人の女性が一生に産む子どもの数の平均である。人口を維持するためには合計特殊出生率が2.1である必要があると言われるが、それに遠く及んでいない。次に社会動態であるが、近年は転出超過の傾向にあり、人口減少が進んでいる。特に20代の東京への転出が多い。これは仕事の都合である程度は仕方ないが、これから社会人になる世代に地元で働きたいと思ってもらうことが重要である。このように、兵庫県は自然動態も社会動態も良い状況とは言えない。しかし、このどちらかがプラスであれば良いというわけではない。例えば自然動態（合計特殊出生率）が良くて社会動態が悪いとしよう。この状態では子どもが多く生まれるものの、大きくなれば他県へ出ていってしまう。では逆に、自然動態が悪くて社会動態が良い場合はどうだろうか。実はこの状況では、子どもはあまり生まれられないものの、転入超過で人口が増える可能性がある。東京都がその例である。東京都は合計特殊出生率が1.1前後であるものの、圧倒的な転入超過で人口が増え続けている。よって、自然動態と社会動態では後者の方が重要であるかもしれない。しかし、自然動態も良いことに越したことはない。他県への転出を抑えるとともに、他県から転入してきてもらい、また合計特殊出生率をあげて兵庫県で子どもを多く産んでもらうことができれば、人口の維持に大きくつながるのではないだろうか。社会動態と自然動

態のそれぞれの改善と、この二つの連動が重要であると思われる。また、先にも述べたように、本研究では生産年齢人口と年少人口の改善を目指しているため、自然動態といっても、特に合計特殊出生率を指すことを述べておく。

では自然動態の改善と社会動態の改善、それぞれのために何が重要なのだろうか。ここで兵庫県庁様から提供していただいた「兵庫のゆたかさ指標」県民意識調査の内容と結果を用いる。これを自然動態に関係する項目と、社会動態に関係する項目に着目してみたい。

SPSS による回帰分析

どのようにアンケートを用いるのかというと、SPSS の回帰分析を使ってアンケート結果を統計的に分析し、どの項目がどの程度重要なかを導く。この回帰分析では、1つの従属変数と、1つまたは複数の独立変数を設定して分析し、独立変数が従属変数にどのような効果をもたらしているのか、どの程度の効果をもたらしているのか、またその分析結果が統計的に有為であるのかを調べることができる。従属変数というのは、独立変数の設定の仕方によって変わる、つまり独立変数に従って変わるということからである。 $y=ax+b$ の y が従属変数、 x が独立変数というのと同じである。実は回帰分析の結果もこのような数式で表すことができる。では次に回帰分析の結果を読み取るのに必要な項目を説明しておく。まずは以下の表を見ていただきたい。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.448	.087		5.141	.000
問2	.339	.018	.395	19.145	.000
5					
問2	.154	.020	.162	7.825	.000
9					

問4 2	.045	.017	.053	2.629	.009
---------	------	------	------	-------	------

a. 従属変数 問24

これはある回帰分析を行った結果である。これは、

従属変数：問24「あなたは、全体として、今の生活に満足していますか」

独立変数：問25「あなたは、全体として、将来の生活に不安を感じますか」

：問29「住んでいる地域は、障害のある人にも暮らしやすいと思えますか」

：問42「お住まいの市・町では、自然の生き物（動物・植物）とふれあう機会があると思えますか」

というように設定し回帰分析を行っている。係数(Bの欄)が+の数値であれば、その独立変数は従属変数に対して+の影響を与え、-の数値であれば-の影響を与えるということを意味している。例えば問25に着目してみると、係数は+の数値である。よって、このアンケートでは選択肢が1から5であるので、問25で1に近い回答をした人は問24でも1に近い回答をし、問25で5に近い回答をした人は問24でも5に近い回答をしているということである。問25は選択肢1「不安を感じない」→5「不安を感じる」、問24は選択肢1「満足」→5「不満」となっているので、将来に不安を感じていない人ほど今の生活に満足しており、将来に不安を感じている人ほど今の生活には不満ということである。また、係数の絶対値が大きいほど、その独立変数が従属変数に与える影響が大きいということを意味している。問42に着目してみると、係数は+であるので、住んでいる地域で自然の生き物とふれあう機会があると思っている人ほど、今の生活に満足しているということになる。しかし、絶対値は0.45であり、問25と比べるとかなり小さい。問42は問25と比べて、問24に与える影響が小さいということである。つまり、住んでいる地域で自然の生き物とふれあう機会があると思っている人ほど、今の生活に満足している傾向はあるが、その傾向は小さいということである。よってここから、自然の生き物とふれあう機会を増やすことよりも、将来の生活の不安を取り除くことのほうが、今の生活の満足度を高めるためには効果的であるということがわかる。政策としては、地域住民の自然の生き物とふれあう機会を増やせば、住民の満足度はあがるもののその効果は小さく、費用対効果が低い。予算が限られている中では、効果があがる

からといって手当たり次第に何でもやっていいわけではない。数ある政策の候補の中から効果の高いものを選びすぐって実施していかなければならない。ここでは、住民の不安を取り除くことの方が効果は高く、できるならば優先して実施されるべきであることがわかる。最後に有為確率の欄である。この数値が0.05以下であれば、その結果は統計的に有為であるといえる。問25、問29、問42の全ての有為確率は ≤ 0.05 であるので、これらの結果は有為であるということである。なお、この回帰分析の結果は、従属変数の問24を y 、独立変数の問25を x_1 、問29を x_2 、問42を x_3 と置くと、 $y=0.339x_1+0.154x_2+0.045x_3+0.448$ と表すことができる。このような数式で表すと読み取りやすい。回帰分析の結果の見方や表し方は以上の通りである。ではここからは自然動態や社会動態に関する項目からいくつかの仮説を立て、回帰分析によってそれらの仮説を検証していきたい。

仮説と検証

まず自然動態と社会動態をよくするためにはどの項目を改善すればいいのかを設定したい。自然動態は子どもが生まれやすい環境にしたいので、問31「住んでいる地域では、子育てがしやすいと思いますか」、社会動態は兵庫県に住み続けてほしいので、問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」という項目を改善していくものとする。では仮説とその検証に入るが、仮説1～2が自然動態に関するもの、仮説3～10が社会動態に関するものである。

仮説1 住んでいる地域の治安が良いと感じている人ほど、子育てがしやすいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問31「住んでいる地域では、子育てがしやすいと思いますか」

独立変数 (x_1) : 問26「住んでいる地域は、治安がよく、安心して暮らせると思いますか」

(x_2) : 問27「住んでいる地域では、住民による登下校時の見守り、夜間パトロールや街灯整備などの安全安心を守る取り組みが行われていると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.651	.060		27.541	.000
問2 6	.251	.025	.226	10.000	.000
問2 7	.209	.022	.211	9.311	.000

a. 従属変数 問3 1

これは $y=0.251x_1+0.209x_2+1.651$ と表すことができる。x1、x2ともに係数の符号が+であり、子育てのしやすさに+の影響を与えている。また両者の係数の絶対値は同じくらい高く、与える影響も同じくらい大きい。有為確率はともに ≤ 0.05 であり、これらの結果は統計的に有為である。

仮説2 子どもの心が健康で豊かであると感じている人ほど、子育てがしやすいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問31「住んでいる地域では、子育てがしやすいと思いますか」

独立変数 (x1) : 問30「お住まいの市・町では、芸術文化に接する機会があると思いますか。

(x2) : 問32「住んでいる地域の子どもは、伸び伸びと育っていると思いますか

(x3) : 問33「住んでいる地域では、心の豊かさを育む教育や活動が行われていると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.432	.064		6.806	.000
問30	.147	.016	.167	8.964	.000
問32	.526	.023	.461	22.411	.000
問33	.186	.023	.172	7.977	.000

a. 従属変数 問31

これは $y=0.147x_1+0.526x_2+0.186x_3+0.432$ と表すことができる。独立変数の三者とも係数の符号は+であり、子育てのしやすさに+の影響を与えている。しかし、係数の絶対値に着目してみると問32が他に比べてかなり高くなっており、与える影響は大きいことがわかる。また、有意確率は三者とも ≤ 0.05 であり、これらの結果は統計的に有意である。

仮説3 周りの人と良い関係を築くことができている人ほど、住んでいる地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問1「あなたは、家族とのコミュニケーションがとれていますか」

(x2) : 問2「あなたには、頼りになる知り合いが近所にいますか」

(x3) : 問3「住んでいる地域で、異なる世代の人と付き合いがありますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.197	.059		20.376	.000
問1	.108	.026	.095	4.204	.000
問2	.093	.019	.125	4.877	.000
問3	.121	.018	.167	6.597	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.108x_1+0.093x_2+0.121x_3+1.197$ と表すことができる。独立変数の三者とも係数の符号は+であり、住み続けたさに+の影響を与えている。しかし絶対値はあまり大きくなく、与える影響もあまり大きくないということがわかる。また、有意確率は三者とも ≤ 0.05 であり、これらの結果は統計的に有意である。

仮説4 災害への備えが整っていると感じている人ほど、住んでいる地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問16「あなたは、住んでいる地域で災害に備えた話し合いや訓練に参加していますか」

(x2) : 問17「あなたは、災害時の避難所と避難方法を知っていますか」

(x3) : 問18「あなたは、家庭で災害に対する自主的な備えをしていますか」

(x4) : 問44「住んでいる地域の、災害に対する備えは、以前より確かなものになっていると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.982	.086		11.412	.000
問16	.055	.018	.078	3.073	.002
問17	.063	.019	.085	3.224	.001
問18	.022	.020	.027	1.104	.270
問44	.181	.024	.172	7.574	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.055x_1+0.063x_2+0.022x_3+0.181x_4+0.982$ と表すことができる。独立変数の全ての係数の符号が+となっており住み続けたさに+の影響を与えている。しかし問44以外の項目は絶対値が小さく、与える影響は大きくないことがわかる。有為確率は問16、問17、問44は ≤ 0.05 でありこれらの結果は統計的に有為である。しかし問18は > 0.05 となっており統計的に有為ではなく、問18に関しては棄却された。

仮説5 住んでいる地域の企業活動が盛んであると感じている人ほど、その地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23 「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問34 「お住まいの市・町は、新しい事業を始めたり、新しい製品などを生みだしたりしやすいと思いますか」

(x2) : 問35「お住まいの市・町には、優れた製品・技術・ブランド力をもった企業があることを知っていますか」

(x3) : 問36「お住まいの市・町は、企業の活動や工場・会社の進出により、活性化していると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.956	.089		10.787	.000
問3	.151	.025	.152	5.986	.000
問4	.076	.018	.103	4.183	.000
問3	.053	.025	.057	2.115	.035

a. 従属変数 問2 3

これは $y=0.151x_1+0.076x_2+0.053x_3+0.956$ と表すことができる。独立変数の全ての係数の符号が+となっており住み続けたさに+の影響を与えている。しかし係数の絶対値をみるとあまり大きくなく、問34がこのなかでは比較的大きいといったところである。有為確率は全ての項目が ≤ 0.05 となっており、これらの結果は統計的に有為である。

仮説6 住んでいる地域の利便性が高いと感じている人ほど、その地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問39「お住まいの市・町では、生活の不便さを補うサービス産業が増えていると思いますか」

(x2) : 問47「住んでいる地域の公共交通は便利であると思いますか」

(x3) : 問48「住んでいる地域は、県内のどこへでも便利に移動できますか」

(x4) : 問45「住んでいる地域は、買い物や通院に便利であると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.088	.078		13.906	.000
問39	.100	.023	.108	4.441	.000
問47	.013	.026	.018	.517	.605
問48	.056	.025	.073	2.282	.023
問45	.096	.022	.134	4.265	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.100x_1+0.013x_2+0.056x_3+0.096x_4+1.088$ と表すことができる。独立変数の全ての係数の符号は+であり、住み続けたさに+の影響を与えている。しかし、係数の絶対値をみると全体的に小さく、与える影響は小さいということがわかる。有意確率は問47を除いた項目は ≤ 0.05 でありこれらの結果は統計的に有意である。しかし問47は > 0.05 となっており、問47に関しては棄却された。

仮説7 住んでいる地域のことを大切に思っている人ほど、その地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23 「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問19 「あなたは、住んでいる地域のことに関心がありますか」

(x2) : 問21 「あなたは、住んでいる地域に誇りや愛着を感じますか」

(x3) : 問49 「住んでいる地域には、自慢したい地域の『宝』（風景や産物、文化など）がありますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	.464	.051		9.155	.000
問19	.114	.021	.123	5.518	.000
問21	.482	.021	.536	23.273	.000
問49	.022	.015	.028	1.515	.130

a. 従属変数 問23

これは $y=0.114x_1+0.482x_2+0.022x_3+0.464$ と表すことができる。独立変数の全ての係数の符号は+となっており、住み続けたさに+の影響を与えている。係数の絶対値に着目してみると、問21は大きく他は小さくなっており、問21は住み続

けたさに大きな影響を与えていることがわかる。有為確率をみると問19、21は ≤ 0.05 となっておりこれらの結果は統計的に有為である。しかし問49は > 0.05 となっており、問49に関しては棄却された。

仮説8 住んでいる地域の景観がきれいで活気があると感じている人ほど、その地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問40「お住まいの市・町の駅前や商店街に、活気が感じられると思いますか」

(x2) : 問46「住んでいる地域のまち並みはきれいだと思いますか」と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.120	.086		13.078	.000
問40	.077	.021	.084	3.655	.000
問46	.194	.021	.207	9.045	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.077x_1+0.194x_2+1.120$ と表すことができる。独立変数の両者とも係数の符号は+であり、住み続けたさに+の影響を与えている。係数の絶対値をみると問40は小さいが問46は比較的大きい。有為確率は両者とも ≤ 0.05 でありこれらの結果は統計的に有為である。

仮説9 住んでいる地域で外国人に対する配慮が為されていると感じている人ほど、その地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問50「お住まいの市・町では、外国人を見かけたり、外国人と接したりする機会が増えていると思いますか」

(x2) : 問51「お住まいの市・町では、外国語の表記が増えているなど外国人にも住みやすくなっていると思いますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.403	.090		15.520	.000
問50	.030	.022	.036	1.325	.185
問51	.104	.027	.105	3.876	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.030x_1+0.104x_2+1.403$ と表すことができる。独立変数の両者とも係数の符号は+であり住み続けたさに+の影響を与えている。しかし係数の絶対値をみると小さく、与える影響は小さい。有為確率をみると問51は ≤ 0.05 で統計的に有為であるものの、問50は > 0.05 となっており問50に関しては棄却された。

仮説10 仕事がうまくいっている人ほど、住んでいる地域に住み続けたいと感じている。

この仮説を検証するために、

従属変数 (y) : 問23「あなたは、住んでいる地域にこれからも住み続けたいですか」

独立変数 (x1) : 問8「あなたは、自分のしごとにやりがいを感じますか」

(x2) : 問10「あなたは、しごとと自分の生活の両立ができていますか」

と設定し回帰分析を行った。結果は以下の表の通りである。

係数^a

モデル	非標準化係数		標準化係数	t 値	有意確率
	B	標準誤差	ベータ		
1 (定数)	1.369	.058		23.412	.000
問8	.150	.023	.167	6.389	.000
問10	.087	.023	.099	3.801	.000

a. 従属変数 問23

これは $y=0.150x_1+0.087x_2+1.369$ と表すことができる。独立変数の両者とも係数の符号は+となっており住み続けたさに+の影響を与えている。係数の絶対値に着目してみると問10は小さいが問8は比較的大きい。有為確率は両者とも ≤ 0.05 となっておりこれらの結果は統計的に有為である。

検証結果のまとめ

仮説を検証した結果、全ての独立変数の係数の符号は+であり、子育てのしやすさや住み続けたさに+の影響を与えていた。その中でも係数の絶対値が大きいものが、与える影響が大きい重要な項目ということになる。その重要な項目を自然動態と社会動態のそれぞれにわけて抽出していきたい。まず自然動態からである。自然動態に関する仮説では仮説1の問26、27と仮説2の問32が高い値を示した。よって、これらの項目が子育てのしやすさに大きな影響を与えていると考えられる。次に社会動態である。社会動態に関する仮説で大きな値

をとったものを順に挙げると、仮説7の間21、仮説8の間46、仮説4の間44であるが、中でも間21は飛び抜けて大きな値を示しており、この項目が住み続けたさに大きな影響を与えていると考えられる。まとめると、

自然動態・子育てのしやすさに関して大きな影響を与える項目

問26「住んでいる地域は、治安がよく、安心して暮らせると思いますか」

問27「住んでいる地域では、住民による登下校時の見守り、夜間パトロールや街灯整備などの安全安心を守る取り組みが行われていると思いますか」

問32「住んでいる地域の子どもは、伸び伸びと育っていると思いますか」

社会動態・住み続けたさに関して大きな影響を与える項目

問21「あなたは、住んでいる地域に誇りや愛着を感じますか」

ということになる。以上のことから、政策を実施するにあたって、自然動態に関しては、「治安を良い状態にすること、保つこと」、「地域の子ども全体が伸び伸びと育つようにすること」が重要であると考えられる。社会動態に関しては、「住民が住んでいる地域に誇りや愛着を感じるようにすること」が重要であると考えられる。これを踏まえて、兵庫県の現状をみていき、どのようにすればいいのかを考察していきたい。

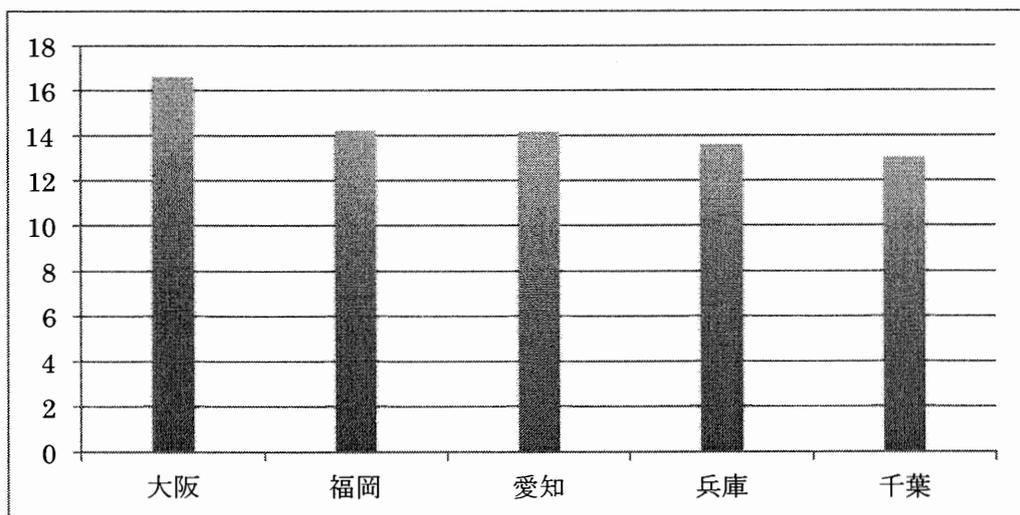
兵庫県の現状と改善

ここでは先の章の最後に述べた3つの要素について、それぞれの現状や取り組みをみていくとともに、どうすれば改善できるのかを考えていきたい。

治安

まず治安とは、人々が生活していく上での基盤となるものである。治安が悪い、つまり安全性が低く多くの見えない危険が周りに潜んでいるという状況では、豊かな心を持って充実した生活を送ることはできないであろう。当然そのような場所では子育てをしようという気持ちは持ちづらくなる。大切な子どもが危険にさらされる可能性が高い場所では、進んで子育てをしたいとは思わないだろう。また、この治安の問題は、次に述べる子どもが伸び伸びと育つかということにも影響を与えると考えられる。さらにここで、マズローの欲求5段階説を紹介したい。これは経営学のモチベーション理論でよく用いられる考え方であるが、ここでも参考になるだろう。欲求5段階説とは、マズローという心理学者による説で、人間の欲求は5段階に分けることができ、下の階層の欲

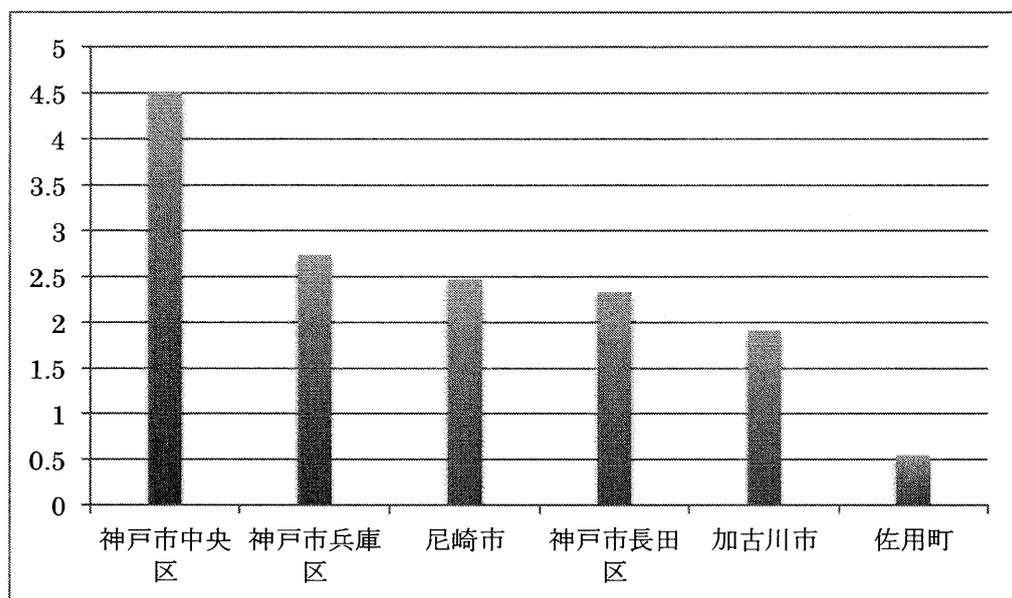
求が満たされれば上の階層の欲求が満たされるという考え方である。その5段階の欲求とは、下から生理的欲求、安全欲求、社会的欲求、尊厳欲求、自己実現欲求である。全ての欲求の説明は省略するが、下から2番目の安全欲求に注目していただきたい。この安全欲求とは、危機を回避したい、安全・安心な暮らしがしたいという欲求であり、まさに治安と関わってくるものである。基本的には、健康でいたいであるとか、しっかりした家で暮らしたいといったような欲求であるが、治安が悪ければこの欲求は脅かされてしまう。さらに安全欲求は下の階層の欲求であり、人間の根本的な欲求であって、これが満たされなければ高次の人間らしい欲求を持って生活をするのが難しくなる。このような状態では、子育てをする大人としても、子どもを授かって子育てをしたいという気持ちを持ちづらく、子どもも伸び伸びと育つことは難しいのではないだろうか。話が大げさになってはしまったが、治安と子育ては密接に関わっており、やはり治安は良くしてその状態を保たなければならない。では、兵庫県の治安についてみていきたい。人口千人当たりの刑法犯認知件数の全国ランキングというものがあるが、2012年の時点で兵庫県は13.58件で全国4位となっている。これは件数が多いほど順位が高くなっているため、兵庫県は全国的にみてかなり治安が悪いと言える。上位5県のデータをグラフとともに載せておく。大阪16.60、福岡14.21、愛知14.14、兵庫13.58、千葉13.04となっている。なお、47位の秋田県は3.96となっている。



人口千人当たりの刑法犯認知件数 上位5位

次に兵庫県内での地域ごとの治安をみていきたい。2009年と2010年のデータによる兵庫県内の刑法犯罪発生率（刑法犯認知件数を人口総数で割ったもの）

ランキングは、上位から順に神戸市中央区4.512%、神戸市兵庫区2.736%、尼崎市2.467%、神戸市長田区2.333%、加古川市1.917%となっている。



兵庫県内の刑法犯罪発生率 上位地域と最下位地域

これも順位が高いほど治安が悪いということになっている。なお最下位の佐用町は0.550%である。尼崎市が抜きん出て1位かと予想したが、意外にも3位であった。これはニュースでも大々的に報じられるほどの凶悪な犯罪が多いからであろう。しかし、犯罪発生率では神戸市中央区や神戸市兵庫区の方が数字は高く、特に神戸市中央区は高い数字になっている。だが、このデータでは昼間人口が多い地域の数字が高くなるようになっている。郊外に住む者が都心に出てきて犯した犯罪は都心の犯罪件数としてカウントされるが、人口は郊外の方にカウントされるからである。よって神戸市中央区という昼間人口の多い地域が高い数字を記録してしまうのは仕方ない。

以上のことをまとめると、兵庫県は全国的にみて治安が悪い。県内で治安が悪い地域は神戸市中央区、神戸市兵庫区、尼崎市、神戸市長田区、加古川市である、ということである。よって、子育てをしやすい環境を作るために、まず治安を良くしていかなければならない。注力すべきは上記の5つの地域である。治安が改善されれば広報で発信するなどして住民に知ってもらうとともに、さらなる治安の向上と治安維持に勤めなければならない。ここで、治安を改善するための方法として割れ窓理論というものを紹介したい。

割れ窓理論

割れ窓理論とは、アメリカの犯罪学者ジョージ・ケリングによって提唱されたもので、彼の論文「Broken Windows」の中で述べられたものである。この論文で彼は警察官のパトロールの話から論を展開している。論の流れは以下の通りである。実験で警察官によるパトロールが実施された地域と実施されなかった地域を比べると、実施された地域の住民の方が身の安全を感じた。実はパトロールによって犯罪率は下がらなかったものの、パトロールが実施された地域の住民は犯罪が減ったとさえ思うようになったのである。これに反対する者は、犯罪の根本的な解決になっていないと主張するだろうし、それは正しいだろう。しかし、次の2つのこと覚えておかなければならない。1つめは、地域住民の不安が取り除かれたこと、住民が不安を感じる要因は無秩序だったということ。2つめは、無秩序と犯罪にはつながりがあるということ。1枚の割れた窓ガラスを放置していると、他の窓ガラスが全て割られてしまうという現象が起きる。窓ガラスが割れた状態で放置されていると、そこには誰も関心を持っていない、他の窓ガラスを割っても大丈夫という心理が働くからである。このような無秩序な状態から犯罪は生まれる。というように論を展開している。この覚えておかなければならない2つめに挙げられているものが割れ窓理論である。この割れ窓理論を詳しくみていく。

割れた窓ガラスを放置していると、それを目にする人にとっては、「この地域には誰も関心を持っていない」というように感じられ、犯罪が起りやすい環境となってしまう。するとまず軽い犯罪が起るようになり、住民全体のモラルも低下することになる。そうすると地域の安全を守ろうとしなくなり、環境がさらに悪化する。そうして、軽い犯罪だけでなく凶悪な犯罪も含めた犯罪が頻発するようになる。よって、どんなに些細なこと（窓ガラスを割る、割れた窓ガラスを放置するなど）でも、秩序を乱すようであれば厳しく取り締まることで、犯罪は起りにくくなる、というものである。つまりこの割れ窓理論によれば、治安を強化するためには、秩序を乱すようなどんな些細なことでも厳しく取り締まる必要があるということである。また、論文「Broken Windows」の実験で、警察官によるパトロールが実施されれば、犯罪率は下がらなくても住民の体感治安は上がることが示されている。よって以上のことから、治安を改善するための政策として、警察官による地域パトロールを強化するとともに、ゴミのポイ捨てや落書き、騒音などの秩序を乱す行為を厳しく取り締まれば良

いのではないだろうか。そうすれば、住民は治安が良くなったと感じるとともに、実際の犯罪率も下がるのではないかと考えられる。ここで、割れ窓理論による犯罪対策を行って、犯罪率を下げることに成功した日本の例を紹介したい。その成功例は北海道すすきののである。すすきののは北海道有数の歓楽街であり、違反駐車が行き交っていた。そこで2001年から違反駐車を徹底的に取り締まり、路上駐車を3分の1以下に減少させた。それと併せて街頭パトロールを強化することで、2年間で犯罪を15%も減少させたのである。よって、割れ窓理論による治安政策は有効であると考えられる。これを兵庫県に当てはめて、どのような政策を行えばよいかを考えてみたい。兵庫県で犯罪率の高い地域、例えば神戸市兵庫区などで、試験的に割れ窓理論による治安対策を行ってみてはどうかだろうか。例えば警察官によるパトロールを強化し、ゴミのポイ捨てや騒音車両などを厳しく取り締まるといったことをすれば、犯罪率が低下し住民も治安が良くなったと感じるようになると思われる。この対策の効果があれば、他の地域でも実施していくことで、兵庫県全体の治安が改善されるのではないだろうか。また、試験的に実施するという意味では、この5地域の中では人口も少なく犯罪数も少ない神戸市兵庫区か神戸市長田区であれば、実施するにあたって比較的成本も低く抑えられるのではないだろうか。長くなってしまったので、この章の内容をまとめることとする。兵庫県は全国的に治安が悪く、特に犯罪率の高い地域は神戸市中央区、神戸市兵庫区、尼崎市、神戸市長田区、加古川市である。治安を改善するための方法として、割れ窓理論による犯罪対策は有効であると考えられるので、この地域のどこかで試験的に実施してみて、効果があれば他の地域でも実施することで、兵庫県の治安を改善することができるのではないだろうか。

子育て環境（地域の子どもが伸び伸びと育つには）

地域の子どもが伸び伸びと育つためには、子育てのための環境や支援が充実していなければならない。病院、子どもが遊べる公園やレジャー施設、買い物ができる場所などが近くにあること、幼稚園や保育園、小学校から高校までの学校が多くあること、習い事を教える施設の種類や数が多いこと、助成金が充実していること、地域住民の子育てへの意識が高いこと、子育ての悩みを相談できる子育て経験者がいること、子育てについての情報が多く手に入りやすいこと、治安が良いことなど、子育て環境には多種多様なものがある。このよう

な子育て環境について、兵庫県の子育て政策を主に担っている健康福祉部子ども局子ども政策課が行っている取り組みをみていきたい。

健康福祉部子ども局子ども政策課とその取り組み

兵庫県の健康福祉部子ども局子ども政策課とは、誰もが安心と喜びの子育てができる子育て支援環境をつくるため、「ひょうご子ども・子育て未来プラン（平成27～31年度）」に基づき、地域団体やNPO、企業、市町等とともに協働し、少子対策及び子ども・子育て支援を推進している部局である。ひょうご子ども子育て未来プラン（平成27～31年度）とは、少子化の現状と課題を鑑み、3つの目標と数値目標をたて、6つの方策を推進していこうとするものである。3つの目標とは、豊かな人間性を育み、安定した生活を築く未来の親づくり、すべての子どもと子育て家庭への切れ目のない支援による、子育てしやすい環境づくり、仕事と生活が調和し、職場・地域が子どもと子育て家庭を支える社会づくりであり、子育てのための環境を整えていこうとすることが目標となっている。数値目標は、2016～2020年までの5年間での出生数22万人、2020年時点での合計特殊出生率1.57となっている。なお、2014年時点での合計特殊出生率は1.41である。6つの方策とは、若者の自立支援による未来の親づくり、結婚・妊娠・出産への切れ目のない支援、就学前の教育・保育と子育て支援、子育てと両立できる働き方の実現、子育て家庭を支える地域社会づくり、特別な支援が必要な子どもや家庭への支援であり、子育てのための環境や支援の整備を進めていこうとするものになっている。またそれぞれの方策について多くの具体的な取り組みを進めていこうとしている。詳しくはホームページをご覧ください。健康福祉部子ども局子ども政策課の取り組みは、このようなプランに基づいて行われているため、子育てのための環境や支援の整備に大いに貢献するものと考えられる。ではどのような取り組みを行っているのかをみていくが、取り組みは3つの位置づけに分類されており、その位置づけごとにみていくものとする。

少子対策及び子ども・子育て支援の総合的推進

この位置づけとして、(1) 兵庫県子ども・子育て支援推進本部の運営、(2) 県子ども・子育て会議の運営、(3) 「ひょうご子育て応援賞」の授与、(4) 子育て家庭・子育て支援への情報提供、(5) Facebook、Twitter等による情報提供が挙げられている。(1) では、関係部局が連携し、兵庫県庁全体で着実

な取り組みを行うため、兵庫県少子対策本部を改組して、少子対策及び子ども・子育て支援を効果的に促進するとしている。(2)では、誰もが安心して子どもを産み育てられ、子どもたちがいきいきと成長していくことができるよう、地域の企業や大学などといったコミュニティと連携して総合的な少子対策及び子ども・子育て支援に取り組むとともに、「ひょうご子ども・子育て未来プラン」の推進状況を県子ども・子育て会議で調査審議し、PDCAサイクルにより継続的な評価・検証を行うとしている。この2つは子育て支援をしていくための機構作りについてのものである。なおPDCAサイクルとは、経営学でよく用いられる管理の手法で、Plan(計画)→Do(実行)→Check(検証)→Action(修正)→そして次のPlanというようにサイクルを回すことで、継続的に改善がされていくというものである。次に(3)では、地域や職場において先進的な子育て支援活動をしている団体の活動を顕彰するとしている。特に企業に限って言えば、これはCSRの観点から子育て支援に積極的に取り組むインセンティブになるかもしれない。CSRとはCorporate Social Responsibilityの略で、企業の社会的責任と訳される。企業は様々なステークホルダー(社員や地域などの企業を取り巻くもの)との関わりの中で存在しており、ステークホルダーの要求に応え、社会とともに発展していく必要があるというものである。CSR活動は説明責任を果たすことやボランティア活動など様々である。従来は企業にとってCSR活動は付随的な業務であったが、今日では少しずつではあるが、CSRは企業活動そのものであると捉えるようになってきており、今後企業による子育て支援の取り組みの推進が期待される。(4)では、少子対策及び子ども・子育て支援の取り組み、先導的な活動を行っている団体などの紹介を「ひょうご子ども未来通信」として県民や団体にメールで配信するとしている。(5)では、子育て支援情報を子育て中の親が手軽に入手できるよう、子育て支援制度やイベント、相談窓口などの身近な情報を、Facebookページ「こども・子育てひみつ基地」や「ひょうご子育てTwitter」などにより提供するとしている。この2つは子育てに関する情報の提供、子育て情報が手に入りやすい環境作りについてのものである。

保育対策の推進

この位置づけとして、(1)保育サービス等の充実、(2)保育所の運営(保育所運営費県費負担金の交付)、(3)保育所機能の充実強化、(4)認定こども園の推進、(5)認可外保育施設の指導等、(6)保育士資格、(7)子

育て家庭への支援が挙げられている。中でも（１）（２）（４）（７）を取り上げたい。（１）では、保育需要の増加に伴う待機児童対策等に対応するため、保育所の緊急整備に取り組むことで、子育て支援体制を整備するとし、５つの事業を進めていくこととしている。それらの事業は、保育所創設のための費用や児童を預かるための経費などの一部を補助するという金銭的な補助が主なものになっている。（２）では、児童福祉施設最低基準を維持するために、民間保育所を運営する経費の一部を補助する（公立保育所は全額市町負担）としている。この２つは保育施設に対する金銭的な補助についてのものである。これにより保育所の数や保育所の質は向上するだろう。（７）では５つの事業を進めるものとしており、多子世帯に対する金銭的な補助や親育ちの支援、病児保育など、子育て家庭に対する全般的な支援を進めるものとなっている。（４）では、都市部の待機児童対策や人口減少地域における子どもの育ちに必要な集団の場づくりのため、幼児教育・保育を一体的に提供する機能及び地域の子育て支援の機能をあわせ持ち、保育の必要性の有無にかかわらず、就学前のすべての子どもが利用できる認定こども園の設置を推進するとしている。最近話題の認定こども園であるが、まずどういったものなのかをみていきたい。認定こども園とは、簡単にいえば幼稚園と保育園の両方の良さを併せ持った施設である。就学前の子どもに幼児教育・保育を提供する機能と、地域における子育て支援を行う機能があり、保護者が働いている、いないにかかわらず受け入れるだけでなく、子育て不安に対応した相談活動や、親子の集いの場の提供などの子育て支援も行う。また、認定こども園という新しい別の施設を建てるわけではなく、既存の幼稚園や保育所などの施設が都道府県などの認定を受けたものが認定こども園となる。この認定を受けても従来の幼稚園や保育所などとしての位置づけを失いはしない。認定こども園には４つのタイプがある。もともと幼稚園的機能と保育所的機能を併せ持つ幼保連携型、認可幼稚園が保育所的機能を備えることによる幼稚園型、認可保育所が幼稚園的機能を備えることによる保育所型、幼稚園・保育所としての認可のない地域の教育・保育施設が認定を受ける地方裁量型である。このように、認定こども園となるためのパターンは多い。認定こども園の概要は以上であるが、兵庫県はこの認定こども園のために４つの事業を進めていくものとしており、認定こども園の整備費の補助や認定こども園制度の普及といった内容となっている。認定こども園は、従来の

幼稚園や保育所などと比べて子育て支援の機能が充実しているのも園を支援し推進していくことは、子育て環境の改善につながると考えられる。

3 子育てと仕事の両立の推進

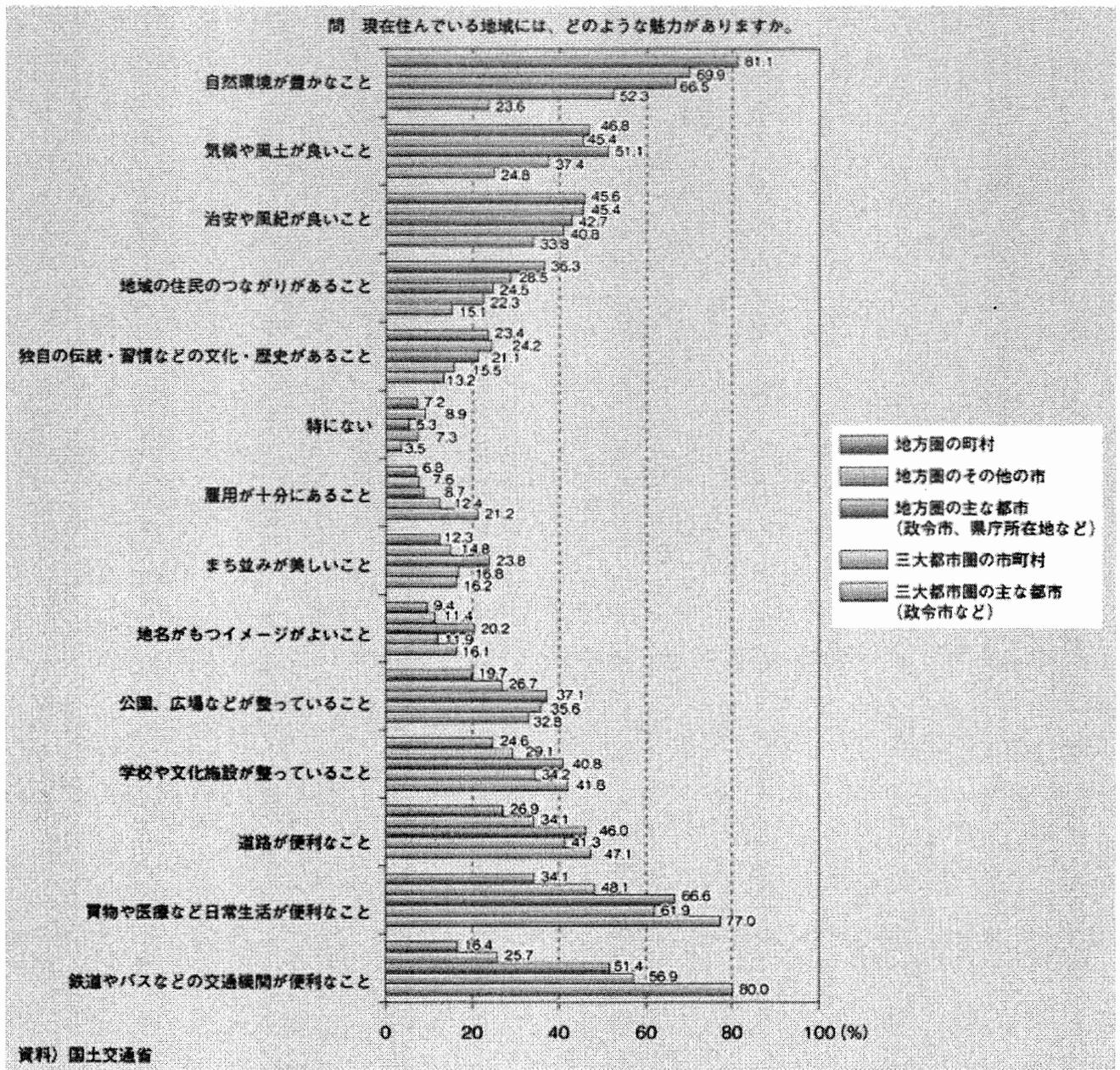
この位置づけとして、(1) ひょうご放課後プラン事業(児童クラブ型)の推進、(2) 放課後児童クラブの整備、(3) 放課後児童支援員認定研修等事業が挙げられている。これらは放課後児童クラブに関する支援である。放課後児童クラブが充実することで子育てと仕事を両立しやすくなり、子育て環境が改善すると考えられる。

以上が健康福祉部こども局こども政策課の主な取り組みである。これらを感じるのは、子育て家庭に対する金銭的な支援が足りないのではないかということである。健康福祉部社会福祉局医療保険課が、母子家庭等医療費給付事業、乳幼児等医療費助成事業、こども医療費助成事業といった医療費に関する金銭的な支援を行ってはいるが、やはり全体的に十分なものではない。ここで、家庭への金銭的な支援と合計特殊出生率に関する海外の事例を紹介したい。例に挙げるのはフランスである。フランスの合計特殊出生率は、世界各国と同様に20世紀の後半を過ぎた頃から継続的に落ちていた。しかし、1994年から徐々に回復し始め、2006年にはついに合計特殊出生率2まで回復した。この高い合計特殊出生率はそれからも維持されており、最新の2013年のデータでも2.01を記録している。先にも述べた通り人口を維持するために必要な合計特殊出生率は2.1であると言われており、この数字にかなり近いところまで持ち直しているのである。それはなぜだろうか。フランスが育児にお金を出しているからである。手厚い家族手当、子どもを持つ家庭に有利な所得税制度、多子家庭に対する特別優遇措置を行っている。もちろん多様な保育サービスを行っている上にある。フランスの育児関連費の対GDP比率は2.6%であり、日本のそれは0.75%である。ここからみても、フランスは日本と比べて育児支援に力を入れており、フランスの子育て家庭は金銭面で充実した子育て生活を送ることができる。これらがフランスが合計特殊出生率を2.01という高いレベルまで回復させた要因である。県と国ではスケールが違いできることも違ってくるが、このフランスの例からわかることは、家庭への金銭的な支援も重要であるということである。保育所などのサービス供給側だけでなく、子育て家庭というサービス需要側にも十分な金銭的な支援をすることが必要である。そうすることが子育て環境の改善になるだろう。出所をどうするのかという問題は大きいが、

やはりお金の支援は効果が非常に大きいものと考えられる。子育てについてできるだけお金の支援をすることで、合計特殊出生率はあがってくるのではないだろうか。

地域への愛着や誇り

地域への愛着や誇りがあるかどうか、その地域への住み続けたさに大きな影響を与えることは簡単に予想されるだろう。仮説検証においても非常に大きな値を示している。愛着や誇りがあるというのは、その地域が好きだと言い換えることもできる。あるいは好きというよりもさらに強い感情かもしれない。そのように感じているところに住み続けたいと思うのは当然のことである。その地域への愛着や誇りについて兵庫県民はどのように感じているのか、愛着や誇りといったものはどのような要因によって醸成されるのかをみていくものとする。まずは兵庫県民が愛着や誇りをどの程度感じているのか、全国ランキングでみていきたい。2010年にブランド総合研究所が発表した「都道府県出身者による郷土愛ランキング」というものがある。これは各都道府県の出身者、全国の3万4257人に対して出身地への愛着度や自慢度の調査を行ったものである。まず愛着度ランキングでは、兵庫県は全国7位の位置に付けており、全国的にみて愛着度の高い県である。また、自慢度ランキングでは全国12位となっており、愛着度ランキングよりも順位は低い、こちらも全国的にみて順位は高く、自慢度も高い県となっている。よって、兵庫県は地域への愛着や誇りが高い県であると言えるだろう。では、その地域への愛着や誇りというものはどういったことによって形成されるのだろうか。この調査の中で、「出身都道府県のどのようなことが誇りに思うか」という項目があり、それに対する答えとしては、「海・山・川・湖などの自然が豊かなこと」が51.1%、「食事がおいしいこと」が43.4%、「道路や交通の便がよいこと」が32.8%、「土産や地域産品があること」が27.4%、「誇れる温泉やレジャー施設・公園など」が27.3%、「伝統芸能、祭り、イベントがあること」が27.2%と続いている。よって、自然が豊かであったり、生活の便が良かったり、食事や施設や行事で有名なものがあつたりすることが愛着や誇りの形成につながると考えられる。また、国土交通省による地域調査の一部によっても、自然環境や豊かさや治安の良さ、生活の便の良さを住んでいる地域の魅力と感じている人が多い。さらにこれによれば、



地方圏の人々は自然環境や気候などの地域らしさに魅力を感じ、三大都市圏の人々は生活の便という利便性に魅力を感じていることがわかる。以上のことから、兵庫県の都市部では利便性を向上させ維持すること、地方では自然環境を整備し守っていくことが、兵庫県民の地域への愛着や誇りを高め、今の高い愛着度や自慢度を維持するために必要なのではないかと考えられる。最後に「かまくらさん」という取り組みを紹介したい。かまくらさんとは、神奈川県鎌倉市に愛着を持つ市民が情報発信者となり、Facebook上で地域の魅力を発信する

というものである。これであれば、地域活動がなかなかできない人であってもSNSを使って気軽に参加できる。兵庫県の高い地域愛着度を活かせば、多くの情報発信がされるだろうし、地域の魅力を共有することで、県民の地域愛着度がさらに高まるのではないかと考えられる。地域の魅力を共有するという機会はなかなかないかもしれないが、SNS上であればそういったこともやりやすいだろう。立ち上げや運営にもあまりコストはかからないであろうし、このような取り組みを行ってみてもいいのではないだろうか。

まとめ

兵庫県は人口が減ってきており、行政が立ち行かなくならないように、少しでも人口減少を食い止める必要がある。人口の増減には自然動態と社会動態の2つがあり、両方を改善することが望ましい。統計ソフトSPSSによって兵庫県の自然動態と社会動態に大きな影響を与えている要因を分析したところ、自然動態では治安が良いかどうか、子どもが伸び伸び育っているかどうか、社会動態では地域への愛着や誇りがあるかどうかことが重要であることがわかった。現状として、治安に関しては、兵庫県は全国的にみて治安が悪い。子どもの成長環境に関しては、子育てサービスの需要側である子育て家庭に対する金銭的な支援が十分でない。地域への愛着や誇りに関しては、兵庫県民の地域への愛着や誇りは全国的に高い。また、愛着や誇りを持つ要素は、都市部と地方で異なる。よって改善策として、治安に関しては、割れ窓理論による対策、些細なことでも秩序を乱すような行為は厳しく取り締まるということ、兵庫県の中で特に治安の悪い地域のどこかで試験的に実施してみて、効果があれば範囲を広げること。子どもの成長環境に関しては、少しずつでも子育て家庭への金銭的な支援を拡充すること。地域への愛着や誇りに関しては、都市部では利便性、地方では自然環境を向上させることや維持すること。また、高い愛着度を活かして、SNS上で地域への愛着を共有できる取り組みを進めること。これらを行うことで、自然動態と社会動態が改善され、兵庫県の人口減少の歯止めの一助となるのではないかと考える。また、治安、子どもの成長環境、地域への愛着や誇りの3つの要素は連動している。治安の良さは、子どもの成長環境や地域への愛着を持つための要素の1つである。子どもの成長環境の良さも地域への愛着を持つための要素である。さらに地域への愛着が高くと、その地域を良くしよう、良い状態を保とうとする活動が盛んになり、治安が良くなる。このように3つ

の要素は繋がっているので、一体的に改善を進めることによって大きな効果が得られるのではないかと考えられる。

参考

都道府県・市区町村ランキングサイト

<http://area-info.jp>

兵庫県健康福祉部子ども局子ども政策課

<http://web.pref.hyogo.jp/kodomo-seisaku/index.html>

兵庫県健康福祉部社会福祉局医療保険課

<http://web.pref.hyogo.jp/iryohoken/>

内閣府 子ども・子育て本部 認定子ども園 概要

<http://www.youho.go.jp/gaiyo.html>

ブランド総合研究所

<http://www.tiiki.jp>